

# 〈まだ愛としてではなく〉

——シェリング『自由論』における無底の概念——

平尾昌宏

〈noch nicht war als Liebe〉.

—Ungrund-concept in Schelling's Freiheitsschrift—

HIRAO Masahiro

## 問題の提示

本稿の課題は、シェリングの『人間的自由の本質及びそれと関わる諸対象の哲学的探究』（1809年）、いわゆる『自由論』における「無底」の意味を出来る限り明確にすることである。しかし、「無底とは何か」という問いはあまりにも抽象的で、それだけでは問いの意味をなさない。我々が具体的に探究するのは、次の三つの問題<sup>1)</sup>である。

- a : なぜ無底は、『自由論』終盤になって初めて、唐突とも言える形で導入されるのか。
- b : 無底から、特に無差異としての無底から、いかにして二元性が生じてくるのか。
- c : 無底にはなぜ無差異と愛とが区別されるのか。

これらの問いはそれぞれ、『自由論』における無底の位置（a）、無底とそれ以外の概念装置との関連（b）、無底の内的構造（c）を問うものである。

『自由論』には多くの思想家たちとの重層的な《対話》とも呼べるものがあるが<sup>2)</sup>、ここでは、難解な「無底」の箇所テキストを読むために、他の思想家との関係や『自由論』に関わる他の諸問題を割愛して、当該箇所、具体的には四二段落から四四段落までとその前後に議論を集中させることにする。

---

平成24年7月5日 原稿受理

大阪産業大学 教養部 非常勤講師

1) 実際には、我々の行論の途上、第四の問いが登場することになる。

2) 平尾 [2006] を参照。その一例は平尾 [2007] で示した。

## 問題の解明

予め、上の問いがなぜ問いとして現われてくるのかを見ることにする。

シェリングは『自由論』本論冒頭で、いわゆる「実存」と「根底」との区別を導入する(一二段落)。しかし、『自由論』全体にとって決定的に重要な役割を果たしているはずのこの区別が、いったいどこから導かれたのかはここでは——先立つ著作『私の哲学体系の叙述』への参照指示という形でしか——明らかにされない。それが明らかになるのはテキスト終盤、無底の登場箇所に至ってようやくのことである。無底が最初から明らかにされていれば、その唐突さの印象も薄められただろうに、なぜそうされなかったか。これが我々の第一の問いである。

これには暫定的な解答を与えることはできる。『自由論』はこの基本的な問いを無視したまま探究を進めるが、しかしその探求のプロセスにおいて、実存と根底の区別ないし二元性が絶対的なものであって、従って体系は二元論という根本性格を持つのか、あるいは逆に究極的には唯一の存在が先立つのであって、従ってこれは一元論的な体系であるのかという問題が浮上してくる(四二段落)。それに対して答えるのが「無底」の概念であり、これによって「二元性に先立つ唯一存在者」(四三段落)が名指しされたことになる。「無底」は「全探究の頂点」(四二段落)とされるが、そうであるのも、この概念が、『自由論』で提示される「体系」の根本性格を明らかにするために導入されたものだったからである。

しかし、そうだとすると、なぜこの問題の解決がここに至るまで先延ばしされるのかは問題として残るだろう。更には、こうした脈絡からすぐさま問われてしかるべきは、この無底からいかにして二元性が生じてくるのか、ということである。これが我々の第二の問いである。従って、第一の問いと第二の問いは密接な連関を持つ。

しかし更には、この無底には二つの側面が区別されている。一つの側面が「無差異<sup>3)</sup>」であり(四三段落)、もう一つの側面が「愛」である(四四段落)。シェリングのテキストを一瞥しただけでは、この二つの関係、そしてそれ以前に、なぜこの二つが区別されるのかは明示的ではない。これが我々の問うべき第三の問いである。また、原初に存在するのが無差異であるとするれば、そこから二元性がどのように生じるのかという第二の疑問は、より深まることになる。つまり、第二の問いと第三の問いは深い連関を持つことになろう。だとすれば、問題の焦点は、他の二つの問いと連関している第二の問いにある。

---

3) 原語では Indifferenz であり、[西谷訳]では「無差別」、[渡辺訳]では「没差別」と訳されている。ここでは、「差別」にまつわるのではないかとと思われるニュアンスを避けるため、それに代えて「差異」とする。

### 予備的解明——同一性と無差異

これらの問いに解明を与えるに先立って、『自由論』とそれ以前との、即ち同一性哲学との関連も視野に入れて、予備的な考察を加えておく。

シェリングは「無底」をあらゆる二元性以前のものであるとする。二元性とは、既に見た実存とその根底<sup>4)</sup>の二元性に集約されるものであるが、より一般的に言えば、実存とは観念的なもの、根底は実在的なものであるとされる。その意味でこの二元性は、『自由論』以前にも見られた、観念的なものと実在的なもの、主観的なものと客観的なものの二元性に相当しよう。シェリング自身の言うところでも、この区別は同一性哲学期の『私の哲学体系の叙述』(一八〇一年)に遡るものであった(一二段落)。しかし同一性哲学においては、まさしく二元性に対する同一性が前面に押し出されていた。同一性体系と『自由論』の体系とを類比的に捉えようとするなら、前者における同一性こそ後者において無底と呼ばれることになるものであるように見える。なるほどシェリングは、無底は対立するものの「同一性としてではなく、ただ絶対的な無差異としか呼べない」(四三段落(Ⅶ, 406))と言いはすが、そのようにわざわざ注意を与えていることそれ自体が、図らずも無差異としての無底と同一性との思想的関連を示唆しているとも言えよう。無差異は同一性と同じでないにせよ、後者が変容することで前者へと至ったのだと。

しかしながら、無差異と並んで愛が無底のもう一つの側面として取り出されることは、同一性体系との明らかな違いである。ただ、いかなる対立をも含まず、前提もしないとされるこの無差異を、もう一つの側面としての愛と並べてみれば、両者はどこか不揃いな印象を与える。無差異は文字通り差異の無さを示す存在論的、あるいは論理的な概念であるとの印象をもたらすのに対して、愛の方は、それを存在論的・論理的に考えることはできるとしても、人格性と切り離して考えることはできない。

日常的な用法では、Indifferenzという語は「無関心、冷淡さ」を意味する。哲学史的に見れば、これはストア派の「アディアポラ (adiaphora)」ないし、そのラテン語訳「インディフフェレンティア (indifferentia)」の独訳であると見ることもできる。ストア派では、我々にとって「どうでもよい」もの、即ちアディアポラに心動かされることなく、不動の心を保つことが重要とされた。この意味でadiaphora=indifferentia=Indifferenzは「(善悪)無記」と訳されることもあれば、「無関心」とも、「無頓着」とも訳される。シェリングが

4) ここで「根底」と訳した Grund について、高尾 [2005] は従来用いてきた「根底」という訳語を「根拠」に代えたと述べている。私自身は逆に、ライプニッツとの関係も鑑みて「根拠」の訳語を用いてきたが、その文脈にのみ回収される事を恐れ、「根底」の訳語も用いる様になった。なお、[西谷訳] 及び [藤田訳] では「根底」、[渡辺訳] では「根拠」と訳されている。それにとまって、Ungrund はそれぞれの訳で「無底」、「没根拠」と訳される。

愛としての無底について語る時、「これはもはや無差異（無関心（Gleichgültigkeit））ではなく、両原理の同一性でもない」（四四段落（VII, 408））としているのは、こうした概念の残響や日常的含意が彼自身の中にもあったことを示している。このように考えてみれば、「無差異」という概念も、「無関心・無頓着」として、愛と同じく倫理的ないし実践的な概念として読むことができる。

しかし、無差異を愛と同じく倫理的な含意を持つものとして読んだのとは逆に、今度は愛を無差異と同じく存在論的・論理的に読むことも可能であるかと考えてみなければならない。

### 無差異と差異

こうしたことを念頭に置きながら、テキストに沿う形で詳細な分析を行おう。

無差異（Indifferenz）は文字通り差異（Differenz）の無さを言う。既に見たように、この概念が導入されたのは、自由の体系が絶対的な二元論に陥るのを防ぐためであった。

「即ち、あらゆる根底に先立って、また全ての実存するものに先立って、従ってあらゆる二元性に先立って一つの存在者がなければならない。我々はこれを、原根底（Urgrund）、あるいはむしろ無底（Ungrund）と呼ぶ以外にどう呼び得るだろうか。それはあらゆる対立に先立っているのだから、その中では対立が区別されることも、何らかの仕方でも存在することもあり得ない。従ってそれは、両者の同一性と呼ぶことはできず、絶対的な無差別と呼び得るのみである。」（四三段落）

しかし、『自由論』を実質的に運動させているのは実存と根底の二元性である。根源的な唯一存在者としての無底から、いかにしてこの二元性が生じて来るのか。我々の第二の問いは当然問われねばならない。この点、シェリングは次のように示唆している。

「実在的なものと観念的なもの、闇と光、あるいは二つの原理を我々がどう呼ぼうとも、それらを対立として無底に述語づけることはできない。しかしながら、それらは非対立としては、即ち選言においては、かつ各々がそれだけでというなら、無差別の述語とすることを妨げるものは何もないのであり、むしろそれによってまさに二元性が（原理の現実的な二重性が）立てられるのである。」（同所）

それが何であれ、対立としての二元性を無差異としての無底に帰することはできない。しかし、ここに見られるように、シェリングは対立ならざる差異ならば、無差異はそれを含むことができるとしている。これは、「無差異からいかにして二元性が生じるか」という問いに対する十全な解答ではないが、それへの一歩ではあり得る。なぜなら、「無差異からいかにして二元性が生じるか」という以前に、そもそも無差異が差異を生むとい

うこと自体が論理的に矛盾を含むのではないかという疑念があり得たからである。しかし、無差異は実は差異そのものの否定ではなく、対立の無さであるとするれば、この疑念は一応は解決される。しかし、ここで問題となるのは、「選言」と訳したDisjunktionである。シェリングは『自由論』の中で論理学を重視している<sup>5)</sup>。その点で言えば「選言」と訳してもよさそうなものであるが、従来、「分立」、「分離」と訳されてきた<sup>6)</sup>。そうであるのは、これを「選言」と読むと——この箇所を単に論理的に、一面的に理解してしまうという問題の他に、次のような問題が生じるからであろう。すなわち、同節直後では、無差異はくあれでもない—これでもない(Weder-Noch) >と同一視されているからである。くあれでもない—これでもない>のであれば、これは選言( $P \vee Q$ )ではなく、むしろ否定の連言( $\neg P \wedge \neg Q$ )である。これは明らかに不整合である。しかも、 $P \vee Q$ からならまだしも、 $\neg P \wedge \neg Q$ から二元性が生じて来るとするのは理解不可能であることを考えれば、Disjunktionを「選言」とする解釈はなおさら成立し難い。しかし、こうなればDisjunktionを「選言」と訳すかどうかの問題なのではない。以上から明らかになったのは、それを「分立」や「分離」と訳したとしても、くあれでもない—これでもない>から二元性が出て来るという事態そのものが、そもそも理解困難だということである<sup>7)</sup>。

これは単に言葉の上だけ、もしくは論理的にそう見えるにすぎず、ここで描かれているのは、論理や言葉を越えた事態なのだと抗弁することはできる。しかし、シェリングが論理学を重視しているからというだけではなく、もしくあれでもない—これでもない>と二元性を結びつけてしまうようなことが許されるのならば、どんな荒唐無稽な主張も許されることになってしまう。これは、学問としての論理学以前の話である。勿論、シェリング

---

5) おそらくこれは、ヤコービらに代表される非知の立場に対する反発からであろう。

6) [西谷訳]では「分立」、[渡辺訳]及び[藤田訳]では「分離」。

7) では、こう考えてみればどうか。ここでずっと「対立」と言われているものは、おそらく排他的選言のことである。また、「非対立としては、即ち選言において」と言われているのであるから、選言=非・対立とは非・排他的選言である。排他的選言即ち $((P \wedge \neg Q) \vee (\neg P \wedge Q))$ であるから、非・排他的選言を得るには、これを否定する。すると、 $\neg((P \wedge \neg Q) \vee (\neg P \wedge Q))$ となり、これをド・モルガンの法則に従って変形すれば、 $\neg(P \wedge \neg Q) \wedge \neg(\neg P \wedge Q)$ が得られる。即ち、「PであってQではない」という主張と「PではなくてQである」という主張の両立不可能性である。くあれでもない—これでもない>と呼ばれていたのは、まさしくこのことではないか。このように考えてみれば、Disjunktionを「選言」と解した上で、それとくあれでもない—これでもない>とを整合化することができよう。しかし、この解釈でも困難はある。それは、ここから直接に二元性が出て来るとされていることを正当化できるか、という難点である。この二番目の解釈を採れば、「選言」とくあれでもない—これでもない>とを整合化することはできるものの、結局はここでも同じ難点に陥ってしまうことになる。

が「論理学」と言う時、それは現代の我々が持つ記号論理でもなければ、アリストテレス以来の伝統的な論理でもない。むしろ、次の節の冒頭に注意されているように、ここで描かれているのは「弁証法的な解明」(四四段落)である。その意を汲んで、テキストに沿いながら、出来るだけ整合的に、しかし曖昧さを排して解釈しなければならない。上の引用に続いて、シェリングはこう述べている。

「それらは非対立としては、即ち選言においては、かつ各々がそれだけでというなら、無差別の述語とすることを妨げるものは何もないのであり、むしろそれによってまさに二元性が(原理の現実的な二重性が)立てられるのである。無底の中にはこのことを妨げるものは何もない。というのは、無底が二つのものに対して全く無差別の態度を取るまさにそのゆえに、無底は両者に対して無関心(gleichgültig)だからである。」(四三段落)

我々は既に前節で、無差異が無関心さと言うことを見たが、ここではまさにそのことが、「無差異から二元性が生じる」ことの根拠とされている。無差異は、差異の全くの否定ではない。既に見たように、「それはあらゆる対立に先立っているのだから、その中では対立が区別されることも、何らかの仕方でも存在することもあり得ない」とされはするが、そこで否定されているのは「対立」であって、二元性ないし「差異」そのものではなかった。純粋な差異そのもの、つまり「非対立」としての差異は、無差異と矛盾しない。無差異は、「対立」の否定ではあっても、そうした差異には「絶対的に無関心」だからである。この、差異に対する無関心さだけを取り上げた時、それがまさに<あれでもない—これでもない>として現れる。これが無差異それ自身の顕在的な有り様である。しかし、そうであるが故に、対立でない限りの差異を、無差異は潜在的に含んでいる<sup>8)</sup>。

---

8) こうしたいかにも抽象的な事態も、しかし、極めて具体的な場面で捉えることが出来る。例えば我々が、恋人と語らうために喫茶店に入る場合、メニューにある様々な飲み物、例えばコーヒーや紅茶、オレンジ・ジュースといった飲み物のうちどれを選ぶかは「どうでもよい」。その時の私にとって重要なのは愛するその人であって、コーヒーも紅茶も区別はない(=無差異である)。しかし、喉が渴いて喫茶店に入ったとすれば、そこでは中身としては同じであるホットコーヒーとアイスコーヒーの違いといった差異が、我々にとって決定的に重要になる。喉が渴いて多くの水分を欲している時、ホットではなくアイスが我々にとって関心あるものとして現れて来る。そこには元々差異があったのだが、それが我々の有り様によって、無差異として現われたり、あるいは差異として現われたりする。あるいは卑俗に過ぎる解釈だと思われるかもしれないが、『自由論』の折り紙付きの難解さは、極めて単純な事柄を、事柄それ自体として描くために、高度に抽象的な言葉を用いていることにあるのではないかと思われる。それは無意味な抽象化、安易な神秘化ではなく、むしろ事柄そのものに即して語ろうとする厳密さへの固執の所産であるとすればどうか。場合によっては古風な神学—存在論を前提としたものにすぎない様に見える(この点 Sturma [1994] の冒頭を参照) シェリングの議論は、むしろ、あまりにも我々の近くにあり過ぎて

## 差異と意味

しかし、こうした考察によって我々が得たものはまだ少なく、シェリングの言葉をほとんど繰り返したに留まる。第二の問いへの解答としては半分でしかない。しかし、無差異はそれ自体は差異の無さではないこと、むしろ差異への無関心さであるという点は決定的に重要である。なぜなら、差異を既に含んでいるとしても、それが無差異である以上は、差異の否定でなければならない。この一見すると矛盾する事態を、無関心は説明するからである。つまり、無差異が差異に対して「無関心である」ということは、差異はあっても、その差異が無差異にとっては「どちらでもよい (indifferent=gleichgültig)」ものとして、つまりは意味を持たないということの意味するからである。この解釈が正しければ、無差異の「無」とは、差異そのものの否定ではなく、差異が《意味》を持つことの否定である。差異がありながらそれが無差異において潜在的なものに留まるのは、そこでは差異の持つ《意味》が無視されているからである。

だとすれば、ここから逆に、無差異から差異が、ないしは二元性が産出されるということとは、実は差異そのものの産出を言うのではなく、むしろ、差異の持つ《意味》が産出されるということであることになる。無差異を「無関心」と読むという提案は、特に奇矯な——あるいは単に哲学的にトリビアルな——思いつきでないばかりか、このこと、つまり決定的なのは差異そのものではなく、それらが担う《意味》であることを告知らせてくれるという意味で不可欠な理解である。

しかし、まだ問題は残る。シェリングは、「<あれでもない—これでもない>もしくは無差異から直接に二元性が生じて来る」と言い、「無差異がなければ、即ち無底がなければ、原理のいかなる二重性もなかったであろう」(四三段落)と言う。このことはまだ全く確証されていない。我々が示したのは、潜在的な差異と顕在的な差異、差異と差異の持つ《意味》とを区別することで、無差異と差異とが矛盾しないと言えるということだけである。なぜシェリングはこれに留まらず、更に一步踏み込んで、「無差異から直接に二元性が生じて来る」と積極的な主張を提示し得たのだろうか。テキストをそのままに読んでみよう。

「もし無差異が両者の絶対的同一性であるとすれば、それはただ、同時に両者であり得るのみであり、即ち両者は対立としてそれに述語づけられねばならないであろうし、だとすれば両者は再び一つのものであることになろう。従って、<あれでもない—これでもない>もしくは無差異から直接に二元性が生じて来る。」(同所)

「無差異から直接に二元性が生じて来る」のは、「もし無差異が両者の絶対的同一性である見えなくなっている事柄の有り様をあまりにも忠実に描こうとしたものではないか。

るとすれば、それはただ、同時に両者であり得るのみであり、即ち両者は対立としてそれに述語づけられねばならないであろうし、だとすれば両者は再び一つのものであることになろう」からだということになる。ここでの主張は、一言で言えば、無差異は絶対的同一性でない、ということに尽きる。このことは何を意味するのか。シェリング自身が注意していたように、同一性は無差異とは異なる。つまり同一性は差異に無関心ではない。しかし、差異を認めるからではない。むしろ同一性において「両者は一つのものであることに」なる。つまり同一性は差異の《意味》を廃棄する。逆に無差異は、差異を否定しないばかりか、その無関心さによって差異を放置する。従って、シェリングの考えでは、無差異は単に差異と無矛盾であるだけではなく、その無差異が同一性ではなく無関心であるというまさしくただそれだけのことによって「直ちに」、差異を放置し、あるいは解き放つことになる。これによって、無差異において既に存在していた差異は、無差異から生じさせられることで、つまり無差異の外に出ることによって自らの《意味》を獲得する。つまり、無差異の無関心さが、差異の《意味》を際立たせるのである。シェリングが、「根底と実存するものとの間の区別は単なる論理的なものであるとか、単に一時しのぎに導入されただけで最後にはまた本物でないことが分かるに至るといったものであるどころか、むしろ非常に実質的な区別であることを自ら示した」と言うのも、差異の持つこうした《意味》の重みによるのでなければならない。これこそ第二の問いに対する解答である。ただし、この解答は、第四の問いを生み出してしまった。即ち、差異の持つ《意味》とは何か。

差異とその《意味》との区別、この区別を再び無差異へと投げ返すなら、無差異において二つの側面が、即ち差異の潜在としての無差異というその静態的な相と、差異を《意味》として顕在化させる積極的な働きとしての無差異というその動態的な相とを区別することができる。しかも、この二つの相は、つまりは無差異が無差異として差異に無関心であるという——そして同一性ではないという——ただ一つのことに基づくのである。従って、現在のところ我々は差異の《意味》を全く知らない。分かっているのは、それが同一性に基づかないということではかないのである。

差異が差異として顕在化し、その《意味》が露わになることは、それ自体が無差異から直接に出て来ることであるにも関わらず、明らかに無差異が持つ差異への無関心が破れるという事態をも齎すはずである。ならば、なぜ無差異はこの事態を、即ち自己否定を許すのか。ここでもまた答えは無関心さであろうか。即ち、無差異はその無関心さによって、同一性でないことによって、自らの無差異性そのものの破壊に対しても無関心であるとも言うのであろうか。それを明らかにするのが、差異の持つ《意味》でなければならない。

## 意味と愛

しかし、この第四の問いで問われているのは差異を成す項の内実のことではない。なぜなら、その差異は、「実在的なものと観念的なもの、闇と光、あるいは二つの原理を我々がどう呼ぼうとも」（四三段落）と言われることになる、やがて対立にまで高まるべき実存と根底の二元性に他ならないことはほとんど自明だからである。この二元性がどのように展開されるかは別に考えられなければならない<sup>9)</sup>。ここで考えておかねばならないのは、従って、むしろ、無底との関連における差異の《意味》である。言い換えれば、我々が上で無差異に即して明らかにしたのは、差異の《意味》としての産出の原因であって、その理由ではないのである。しかし、そして、その理由、差異が差異として顕在的な《意味》をもたねばならないのはなぜかを明らかにするものこそ、無底のもう一つの側面としての愛である。このことは四四段落の冒頭ですぐさま次のように描かれる。

「無底が等しく永遠な二つの始源に自らを分つのは、それによって、無底としての無底の中では同時にあることも、あるいは一つであることも出来なかった二つのものが愛によって一つとなるためであり、つまり、無底が自らを分つのは、それによって生と愛とが存在し、人格的な実存が存在するために他ならない。」（四四段落）

「愛によって一つとなるため」、これがその理由である。重要なのは、愛は「もはや無差別（無関心）（Indifferenz（Gleichgültigkeit））ではなく、しかもそうでありながら両原理の同一性ではなく」（同所）と言われていることである。つまり、愛とは働きであって、状態ではない。無差別がその動態を持ったように、愛もまた動く。

しかし、従って、ここで描かれている事柄そのものはきわめて単純な事態である。無差異から差異が、そして二元性が生じ、それが愛によって統一される。無差異は無関心であることによって差異の顕在化を許したが、逆に愛は無関心でないことによって、差異を統一する。従って、無底とはこの差異化と統一の運動全体を包む概念であり、その両極の働きがそれぞれ無差異と愛なのである。これが我々の第三の問いへの答えであった。

しかし、ここにもまた新たな、派生的ではあるが決定的な疑問が生じる。この「愛によって一つになるため」という理由ないし根拠は、一体どこまでを支配するものなのか。つまり、無関心としての無差異から差異が産出されるそのこと自体にも愛は促し、働きかけていたのか、あるいは、愛は差異が生じたがゆえに、それを統一するものとして現われたのか、ということである。答えは明らかに前者であるように思える。「無底が等しく永遠な二つの始源に自らを分つのは……二つのものが愛によって一つとなるため」だと言うので

---

9) 無差異から生じた差異が、対立にまで高められるプロセスが、『自由論』における悪論となるが、これは別に論じる。

あるから。しかし、そうだとすれば、先に引いたシェリングの言葉は矛盾を含むことになる。なぜなら、無差異が二つに分かれ、差異を生産すること、即ち無差異の無関心さを破ることへの促しがそれ自体として愛の働きであるのなら、つまり、その時に既に愛が存在し、働いていたのなら、「無底が自らを分つのは……愛が存在するために他ならない」とは言えないだろうからである。つまり、最初に存在したのは無差異なのか、それとも愛なのかは、ここからすれば全く未決定に留まらざるを得ないのである。実際シェリングは、実は無底の概念を導入する直前、既にこのことを彼自身次のように述べている。

「愛は、根底が、そして実存するものが(分離されたものとして)存在した以前、その時に存在したものなのであるが、しかし、まだ愛としてではなかった(noch nicht war als Liebe),むしろ——我々はそれを何と呼べばいいのか?」(四一段落)

これによって、我々は上の問いへの解答を与えられるというよりも、むしろ、その問いが宙ぶりに留まらざるを得ないこと、その必然性を思い知る。シェリングは「それ以前に愛は存在した」と明確に語り、にもかかわらず、それは<まだ愛としてではなく>と言い、そしてついには、それに対する解答不能を、口籠る沈黙のダッシュによって、あるいは、彼自身が発する疑問として事柄自体に語らせるしかなかったのである。

## 愛と時間性

しかし、この言葉そのものは口籠っているようにも、それが置かれている位置は、別なことを語っている。なぜなら、シェリングはまさしくこの口籠りの後で初めて、「無底」を語るからである。愛はテキスト上、無底が登場する以前から既に語られている。しかし、無底は上の引用の後で、それに促されることによって、初めて登場するのである。『自由論』の後半になって唐突に登場するかに見える無底だが、この登場の仕方は必然的である。つまり、無底は初めから登場し得るような単なる原初の同一性ではなく、二元性を乗り越える愛が問題となって初めて登場せざるを得ないものだからである。これが我々の第一の問いへの答となろう。とりわけ、愛は既に早くから登場していたものの、無差異は全く不意に登場する。それは、愛=無底は、いわば無差異=無底の認識根拠であり、無差異=無底は愛=無底の実在根拠だからである。シェリングはここでは認識根拠に従って叙述を進めているがゆえに、無差異とともに無底の登場が遅れることになっているのである。

この意味では、無底が無差異と愛として両様に語られる、というのは正確ではない。また、それゆえ「なぜ無底が二つの側面として語られるのか」という、我々の第三の問いそのものが転倒したものでしかなかった。なぜなら、<愛は存在したが、それはまだ愛ではなかった>という、矛盾としか言いようがない事態を改めて表現するために導入されたのが「無

底」だからである。「我々はそれを何と呼べばいいのか？」（四一段落）という問いを、修辭疑問ではなく、解答を求める真の問いであると解するなら、それに対する解答こそ、「我々はこれを、原根底、あるいはむしろ無底と呼ぶ以外にどう呼び得るだろうか」という無底概念開陳の開始の一文（四三段落）である。つまり無底は、問われるべきものというより、むしろ、口籠らざるを得ない事態を表現し直すための答えなのである。無底は、それが無底であるがゆえに難解なのでも、神秘的あるいは荒唐無稽なのではない。むしろ、愛というものそのものが必然的にもつ特性が無底を求めるのである。

このことが改めて、無底がなぜ無差異と愛という二側面を持つように見えるのかを説明する。無底とは、根源的には愛に他ならない。しかし、それは原初において存在しながら、かつ＜まだ愛としてではなくあった＞。無差異とは、こうした無底＝愛の、＜まだ愛としてではなくあった＞を示すものである。産出され、やがて統一される差異を挟んで、その産出を担う無差異と統一を担う愛という図式は分かり易い。しかし、ここで描かれているのはそうした整った対称的な構造ではない。シェリングが「無底」という奇怪に見える概念を導入せざるを得なかったのは、この＜まだ愛としてではなく＞という事態があるからに他ならなかった。敢えて言えば、「無底」という概念そのものは何ほどのものでもない。四二段落冒頭に言われる「探究全体の最も高い点」とは、この後に四三段落で登場させられる無底の探究を指すものではあろう。しかし、これを「最も高い点」にまで引き上げてしまったのは、実に＜まだ愛としてではなくあった＞である。真に我々を揺り動かしているのは、この＜まだ愛としてではなくあった＞であり、そして、極論すれば「まだない (noch nicht)」ということ、これこそが、我々の第四の問い、差異の持つ《意味》への問いに対する答えである。だとすれば、この、概念とすら言えない＜まだ（愛としてでは）なく＞が図らずも意味しているのは、実に時間の根源に他ならないのではないか。即ち、無差異からの差異の差異としての、《意味》としての産出とは、＜まだ愛としてではなく＞が、事後性において事前性が露になることを意味するのであり、そこで産出される差異の《意味》とは即ち、事後一事前の時間性であり、そして、愛はこの時間性においてこそ存在する。このことをシェリングは「生成」と呼ぶのである。愛は全てに先立ち、しかもそれは＜まだ愛としてではなくあった＞。

こうして、我々が問いとして問うた、なぜ無底は、『自由論』終盤になって初めて、唐突とも言える形で導入されるのか、また、無底から、特に無差異としての無底から、いかにして二元性が生じてくるのか、更に、無底にはなぜ無差異と愛とが区別されるのか、という三つの問いは、全て第四の問いへのこの答え、即ち時間性へと収斂する。シェリングは、先にも引いたように、四三段落で「もし無差異が両者の絶対的同一性であるとすれば、

それはただ、同時に両者であり得るのみである」と語っていたが、これは無差異＝無底が同一性でないということは、そこには同時性ではなく、差異の《意味》としての時間性が組み込まれていることを裏側から述べたものであったことが分かる。

シェリングは根底と実存の区別に関わっても「先立ち (Vorhergehen)」(一三段落)に触れている。渡邊が注するように<sup>10)</sup>、フアマンズはこれを論理的先行と解し<sup>11)</sup>、ハイデガー<sup>12)</sup>はここに根源的な時間性を見ている。シェリング自身がこれを「時間上の先行でも本質上の先行でもない」(同所)としていることだけに注目すれば、両見解はともに退けられてしまうことになる。だが、上のような我々の考えからすれば、この点に関してはハイデガーの解釈の方が優位である。ただし、そこには留保が必要である。シェリングがここで述べているのは、先行者 (Prius) としての実存と、実存の根拠として実存に先立つ根底との相互の先行、それによる「循環 (Zirkel)」である。だとすれば、ここからは時間性は出て来ない。真に「先行」が現われてくるためには、この循環における相互の先行という対称性が破られなければならない。この対称性に破れを齎すものこそ、愛が初めから存在し、かつその時には<まだ愛としてでなくあった>ということである。これこそが真に時間性の根源である。無差異が潜在的に含んでいた差異が持つ《意味》はここにある。無差異から解き放たれた時、差異が担うことになる《意味》とは、即ち時間性に他ならない。そして、この《意味》の成り立ちを促すものこそ<いまだ愛としてではなくあった>愛であり、同時に、この時間性という《意味》を自らの本質として生成するのが愛である。

繰り返せば、この時間性は循環的な時間性ではない。それは<まだ愛としてではなく>から本来的な愛への生成として、不可逆な時間性である。しかしまた、直線的に持続する時間でもない。厳密には、この時間性とは、後になって愛として生成する無底すなわち事後性における<まだ愛としてではなく>の事前性に由来するものであった。すなわち、『自由論』における愛は、その本来的な姿において、必然的に遅れてくるものなのである。われわれが第一の問いを問わざるを得なかった理由もここにある。

無底が未だ愛ならざる愛としての無関心＝無差異を含めて「無底」と呼ばれねばならなかったのは、愛が単なる終極であるに留まらず、むしろその本質に<まだ愛としてではなく>を含むから、つまり、愛とはまさに生成であり歴史の全体だから、「あらゆる根底に先立って、また全ての実存するものに先立って、従ってあらゆる二元性に先立って」(四三段落)存在し——ただし<まだ愛としてではなく>——、「あらゆるものから自由で、し

10) 渡辺 [1980], 四二八頁への注 (1)。

11) Fuhrmans [1964], S. 149.

12) Heidegger [1974], S. 135ff.

かもそうでありながらあらゆるものを貫いて働く慈悲 (Wohlthun), 一言で言えば, 一切中の一切たる愛」(四四段落)として, 全時間=歴史を背負ったものだからである。

### 結び, あるいは浮上する課題

以上によって我々は, 「無底」に関する解明を一通り終えたことになる。と同時に, 以上の議論が半面でしかないことも明らかになった。なぜなら, 我々が幾ばくか明らかにし得たとしたら, それは〈まだ愛としてでなくあった〉愛, つまり愛の事前性に過ぎないからである。それに対して, 「もはや無関心ではない(nicht mehr Indifferenz ist)」(四四段落)のような, 〈既にしてもう愛として〉ある愛については, 我々はほとんど触れられていない。愛は無底が名指しされる以前から登場していたのに対して, 無差異は無底とともに遅れて登場している。これは無差異と愛との圧倒的な非対称性を示している。無差異を〈まだ愛としてではなく〉, しかし存在した愛として語ることはできても, 愛を〈既に愛として〉現に存在する無差異と呼ぶことはできない。真に問題性を孕むのは, 〈既にしてもう愛として〉あること, 即ち愛の事後性であり, だが, これについて考えるためには, つまり, 愛の真の《意味》を考える<sup>13)</sup>ためには, それをもたらし差異から二元性への発展を踏まえねばならない。この点の解明なしには, 愛が〈まだ愛としてではなく〉を含んで無底であることの意味が明らかでないばかりか, 単なる矛盾に過ぎないことになってしまうからである。矛盾する二項を並べて時間軸上にあるとすれば一応の解決は得られるとしても, それだけでは時間の《意味》が明らかになったとは到底言えないだろう。

### 〈一次文献〉

シェリングのテキストは, 慣例により, 基本的には次の全集による。

◎F. W. J. Schelling sämtliche Werke, Hg. von K. F. A. Schelling, 1856-61 [SW].

特に『自由論』に関しては, 次の版を参照した。

◎F. W. J. Schelling, Über das Wesen der menschlichen Freiheit, Hg. mit Einl. und Anm. von H. Fuhrmans, 1964, Reclam.

◎F. W. J. Schelling, Über das Wesen der menschlichen Freiheit, Hg. mit Einl. und Anm. von T. Buchheim, 1997, Felix Meiner, Ph. B.

---

13) この点については, 平尾 [1996] 及び平尾 [2001] でも指摘だけはしておいたが, 本来的な解明には至っていない。平尾 [2010] ではコンパクトな解答は与えておいたが, やはり十分な解明ではない。

『自由論』邦訳としては、次のものを参照した。各々特徴があり、裨益されるところが大きかった。

- ◎西谷啓治訳『人間的自由の本質』岩波文庫、1951年。
- ◎渡邊二郎訳『人間的自由の本質』中央公論社「中公バックス・世界の名著43」,1980年〔渡邊訳〕。
- ◎藤田正勝訳『人間的自由の本質とそれに関連する諸対象についての哲学的探究』燈影舎「シェリング著作集〈第4a巻〉自由の哲学」,2011年〔藤田訳〕。

なお、『自由論』からの出典指示には、各種刊本・翻訳との照合を容易にするために、段落番号を用いた。この番号は、〔渡邊訳〕で段落の冒頭に示されており、研究者の中にも利用者がある。

#### 〈二次文献〉

- ◎Fuhrmans, H. [1964], Anmerkungen, in: Reclam-Ausgabe der Freiheitsschrift.
- ◎Heidegger, M. [1971], Schellings Abhandlung über das Wesen der menschlichen Freiheit [1809], Hg. von Feick, Hildegard, Max Niemeyer = ハイデガー, マルティン (木田元・迫田健一訳)『シェリング講義』新書館, 1999年。
- ◎平尾昌宏 [1996]「善意と愛・選択と生命——ライプニッツとシェリング『自由論』における神概念——」『理想』657号。
- ◎同 [2001]「誤謬と悪, 方法と愛——デカルトとシェリングにおける人間的自由と弁神論——」『シェリング年報』9号。
- ◎同 [2006]「自由における対話——シェリング『自由論』を読むために——」『立命館文学』595号。
- ◎同 [2007]「スピノザを巡るシェリングとヤコービとの対話——『自由論』序論部の読解——」『スピノザーナ』8号。
- ◎同 [2010]『哲学するための哲学入門——シェリング『自由論』を読む——』萌書房。
- ◎Sturma, D. [1994], Zur Wiedererwägung eines Begriffs positiver Freiheit, in: Zeitschrift für philosophische Forschung, Bd. 48-2.
- ◎高尾由子 [2005]「シェリングにおける根拠の問題」『哲学・思想論集』23号。
- ◎渡邊二郎 [1980]「訳注」上掲, 渡邊訳『人間的自由の本質』所収。

#### 〈欧文概要〉

HIRAO, Masahiro: <noch nicht war als Liebe>. Ungrund-concept in Schelling's

Freiheitsschrift.

In this paper, we clarify the concept of 'Ungrund' in Schelling's 'Freiheitsschrift' through following three questions:

1. The reason of introduction of the 'Ungrund' concept for the first time in the final phase of the work.
2. The way the duality is brought forth from 'Ungrund' as Indifference.
3. The reason of distinction between the Indifference and the Love in 'Ungrund'.

Among these, <1.> is a question concerning the position of 'Ungrund' in the structure of 'Freiheitsschrift', <2.> is concerning the relation between 'Ungrund' and other concepts within the system of freedom; and <3.> is needed to reveal the inner structure of 'Ungrund'. Through examinations of these points, we can clearly see that <1.> is combined with <2.>, and <3.> is closely related to <2.>. Therefore, we focus on <2.> as the main point.

According to Schelling, the Duality of Existence and Ground or the difference between them emerges from 'Ungrund' as the Indifference. It means that the difference, which is potentially hidden within 'Ungrund' as Indifference, is led to have actually one fundamental <meaning>. Hence, we have to solve the fourth question: what is the <meaning> of the difference?

During the process of solving these questions, especially question <2.>, we can come to the answer of question <4.>, since it is recognized that the essence of 'Ungrund' is Love, but it was not yet as Love (noch nicht war als Liebe) in the beginning when 'Ungrund' was yet Indifference. In other words, the <meaning> of the difference is <time>. From these considerations, we conclude that 'Ungrund' is a concept in which the dynamic form of <time> is confined.